

私は年賀状を書くのをやめた

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

正月に因んで、二週にわたり「正月という時間」「年賀状交換の同時性」というブログを書いた。そして、今回は、最後にもう一つ、「私は年賀状を書くのをやめた」という題で書こうと思う。

これまで、時間の有限性ということを基礎に、この有限性をワンステップ乗り越えた人間同士が、新しい時間の始まりを祝して、同等の立場から同時に交換し合うのが新年の挨拶であること、そして、それが形となって現れたのが、年賀状交換の同時性だということを述べた。

それが、ここへ来て、「私は年賀状を書くのをやめた」などと告白すると、それでは今まで書いたことは何だったのかと言われてしまいそうだ。

私自身は、正月というハレの日の重要さがよく分かっているつもりだし、年賀状交換の良さも十分に認めている。だが、それにもかかわらず、平成14年の正月からはピッタリ年賀状を書くのをやめてしまった。

ちょうど、三十年勤めた大学を退職し、フランスに居を定めた年だったので、キリが良かったということもある。外国住まいなのでしばらく欠礼させていただきます云々の挨拶状をみんなに送ったが、外国からだって年賀状ぐらい簡単に送れる時代だから、あまり気の利いた口実とは言えないかも知れない。ただ、お互いに余分な郵便代をかけないで済むことは確かである。

年賀状をやめたもっと大きな理由は、実は、私にとって年末年始に年賀状を書くことが、この三十年間、大変な苦痛だったということにある。

元旦を挟んだ約三十日の間、私は朝から晩まで年賀状に掛かりつきりになるのだ。持って生まれた悪筆の上、文章の拙さがひどく気になるほうなので、何度も書き直しているうちに、一日が終わってしまう。

これは、印刷したハガキを使っても同じだ。自筆でひとこと加えるのが礼儀だと言われているから、何かちょっとしたことを書き加えると、周りに印刷されたキレイな文字があるだけに、自分の手書きの文字のぶざまさがいつそう目に付いてしまう。

相手の氏名を表書きするのも大の苦手なのだ。意識すればするほど奇妙な、不格好な、歪んだ文字になってしまう。相手に「これが自分の名前か」と思わせるのが失礼なくらいの悪筆なので、ついこれを書き直すことになるのだが、そのたびに年賀ハガキを一枚犠牲にしなければならない。

こんな調子なので、元旦からの三が日は、新しく来た年賀状に返事を書いたりするだけで、ほとんど一日が終わってしまう。せっかくのオメデタイ一年の始まりが、なんとも非生産的な苦行の連続で、無為のうちに過ぎ去ってしまうのだ。大事なことは何もできない。

しかし、これだけならまだ良いのだ。手紙を書くという単純な作業で終わるなら、みんなで正月という時間を祝うための、いわば身体的な儀礼として、何とか我慢することもできよう。

だが、私にとって、そこにはもっと大きな苦痛があるのだ。それは、新年早々、生々しい人間関係から解放されないということだ。一枚一枚の年賀状が、それぞれ書いた人の個性を運んでくる。年賀状を通して相手の人間性が見えてしまうのだ。

自分では、あまり余計なことを考えずに、新年のメダタサをみんなと一緒に純粋に祝おうと思っているのに、そこに人間くさい感情の動きや起伏が入り込んできて、色んなものが見えてしまう。それも取るに足らないミミッチイことばかりなので、我ながら恥ずかしいくらいなのだ。

いつの間にか、正月という時間を祝うことの「内容」そのものよりも、その「形式」のほうに関心が移っているのだ。つまり、それにまつわる対人関係や儀礼の同時性ということが前に出て、肝心のお祝い事はどこか遠くへ飛んでしまい、かすんで見えなくなっている。

前回のブログでも言ったように、ポツダム会議の議場へ三つの扉から同時に入ったチャーチル、スターリン、トルーマンの三人の政治家が守ろうとしたのは、内容としての国家の威信であるが、その形式のほうを見れば、これが世界を動かす大政治家の行動だとは思えないほど滑稽なものであり、まさに喜劇的一幕である。

彼らが演じた形式としての行動ばかりに目を向けていると、内容としての外交政治の重要性を見落とすことになるであろう。年賀状が見せてくれる形式も、一見したところ詰まらないことばかりである。

そこには、職場の上下関係や、知人同士の力関係、親しさの濃密度などが現れていて、正月というハレの日には考えたくもないような、愚にも付かないことばかりだと言ってよい。

年賀状を出してくるのは、本人の意志なのか、それとも返礼に過ぎないのかとか、なぜ去年は書いてきたのに、今年は止めたのかとか、こちらが手書きで苦労して書いているのに、相手は印刷文字だけのハガキを送ってきたとか、こちらが「お願い申し上げます」などと丁寧な口調を使っているのに、「願います」などとイヤにぞんざいな口調ではないか、などといった雑多なことが頭に浮かんでくる。

正月早々、こんなミミッチイことに気を取られている自分自身が情けないくらいなのだが、これが、年賀状を書いたり受け取ったりすることに多かれ少なかれ付きまってくるメンタリティであることは否定できない。

そして、実は、こういう愚にも付かないことが、新年のメダタサを祝うことの内容そのもの、その本質を守るための気遣いとして、重要な意味を持ってくるのだ。

それは、このハレの日を祝うことの同時性や同等性を守ろうとする気遣いにほかならないのである。しかし、このように、全員が守ろうとしている内容としての同時性や同等性は、形式としてのそれとは別のところにある。

それは、挨拶が先になろうが後になろうが、地位が上であろうが下であろうが、言葉が丁寧であ

ろうが無礼であろうが、そんなこととは関わりのないところにある、生きていることの同時性であり同等性なのである。

ただ、その内容に近づき、それを祝うためには、三つの扉から同時に入っていった政治家たちのように、形式としての身体的儀礼を通さなければならない。

そして、あまりにその形式だけを重く見ると、肝心のハレの日のメデタサは遠くかすんだものになってしまい、我々の行動は、取るに足らないことばかりを気にする、喜劇的一幕になってしまうであろう。

私が年賀状を書くのをやめた理由は他にもあって、実は私のほうから止めたというよりも、半数以上の相手から来なくなったのである。

私は、平成12年に、二十数年かかって完成したライフワークとも言える本を出版した。上下巻あわせて8000円の本だったが、私は自腹を切って多数の友人や知人に贈呈した。しかし、半数以上の人たちからは何の返礼もなかった。

そして、平成13年の正月には、この人たちからの年賀状も届かなかった。理由はよく分からないのだが、これは気まぐれな学者の世界でも異例のことである。これを機に年賀状を書くのはやめようという私の意志は固まった。年賀状交換の空しさが、その苦痛に重なったからである。

年賀状をやめて良かったか悪かったか。悪かったと言える面もある。完全に孤独になったからだ。良かったと言える面もある。完全に孤独になれたからだ。

年賀状は、あんな一枚のハガキにすぎないものだが、人間関係の断絶をもたらす点では恐ろしいほどである。現に社会的活動を行っている人たちは、絶対に止めないほうがいい。社会で役立つのは、年賀状の形式的な側面だからである。

良かったと言えることは、完全に孤独になれたことだが、おかげで、全面的な自由を手に入れることができたし、年賀状の形式的な側面に頼らないでも、真に祝うべきものを祝えるようになったからである。

正月という時間の「無限性」についても書かなければならないし、それとともに「直線的時間」や「円環的時間」についても述べる必要があるのだが、それらについてはまたの機会に譲るとしよう。

[2008/01/19 magmag]